

ローマ人への手紙2章17-29節 「ユダヤ人の自負」

1A 律法への誇り 17-24

1B 知識と真理 17-20

1C 神への誇り 17-18

2C 教師としての自負 19-20

2B 律法違反 21-24

1C 自分を教えない矛盾 21-22

2C 神への侮り 23-24

2A 割礼の価値 25-29

1B 律法の行い 25-27

2B 心の割礼 28-29

本文

ローマ人への手紙2章を開いてください。私たちは午前中に2章前半を見ました、今は、後半部分、17節から見ていきたいと思います。これまでのパウロの、福音についての議論は、主に異邦人に対するものでした。異邦人が神を知らないから、神に責任を問われることはないということへの反論から、自分は正しいとしている人々に対して、他人を裁きながら、自らを裁いている問題について解き明かしていました。

そして、パウロは自分自身もユダヤ人ですが、ユダヤ人に対して語り始めます。「**あなたがたが自らユダヤ人と称し**」という言葉から始まりますね。ユダヤ人というのは、単に血縁がユダヤ人に限りません。ユダヤ教を持っている民族と言ってもいいです。

ユダヤ教の中では、「すべてのユダヤ人は救われる」というものがあります。ユダヤ人であれば自動的に、神の国に入れます。ですから、自分がユダヤ人であるということに、救いと誇りを持っています。しかし、旧約聖書には、そのようなことはユダヤ人というだけで救われるということはありません。ユダヤ人として、神に背いて滅ぶことを神は警告しておられます。(マタイ 3:7-9)

そして、ユダヤ教にとって、割礼がユダヤ人であることの印です。彼らの父祖アブラハムに対して、神がご自分の契約の民として、男子の包皮に割礼を施すことを命じられました。割礼があるので、それで神の所有の民になっているという確認ができました。モーセの律法の中で八日目に割礼を施すことが命じられています。そして、もう一つ、律法であります。トーラとも呼ばれますが、トーラをこよなく愛することが重んじられます。ユダヤ教のシナゴグに行けば、私たちキリスト者が聖書を大事にする以上の、神のこぼへの愛が伝わってきます。巻物があり、その巻物を携えて、

会衆の間を巡り、人々は巻物を触るなどして、トーラへの愛を示します。律法と割礼、この二つが、ユダヤ人がユダヤ人であるゆえの根拠とさえなっています。

こうした背景を持って福音書を改めて読めば、イエス様が何に対して対峙しておられたかを知ることができるでしょう。律法を愛し、誇っているのですが、その大事にしていることが、必ずしも守り行っているのではない、ということです。律法についての人の解釈を、実際の戒めよりも大事にして、本末転倒になっている場合もありました。使徒の働き 15 章、エルサレムで、なぜ割礼や律法のことで大議論になったか分かるでしょう。ペテロは、パウロと同じように、次の結論に達しています。「使 15:8-10 そして、人の心をご存じである神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。9 私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。10 そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか。」ユダヤ人として、律法の頸木が負いきれなかったこと。そして、神が心を信仰によって清めてくださること。この二つについて、パウロも語っています。

この問題はユダヤ人ではない異邦人の信者である私たちにも、ともすると当てはまる問題です。神のことばにある真理と知識を持っていることが自分たちにとっての誇りとなり、自分たちは知らない人々に対して教えなければいけないと勢いづくこと。本来は自分に語られたことであるのに、それを、すべて他者を変えようとしていくことに使うこと。それから、外見の儀式や活動によって、自分たちは正しいとしていること。内面ではなく、外面を求める過ちです。

1A 律法への誇り 17-24

1B 知識と真理 17-20

1C 神への誇り 17-18

¹⁷ あなたが自らユダヤ人と称し、律法を頼みとし、神を誇り、¹⁸ みこころを知り、律法から教えられて、大切なことをわきまえているなら、

「ユダヤ人」という名は、イスラエルの十二部族の一つ、ユダ族から来ています。聖書には、ヤコブの新しい名、イスラエル人とも呼ばれますし、また、ヘブル人という名でも出てきます。アブラハムが、ユーフラテス川を越えてカナンの地に来ましたが、「越える」というのがヘブルの名の由来になっています。すべてが同じ人々です。

ユダヤ人は、バビロンに捕らえられた人々が七十年後に、ユダ族を中心にしてエルサレムに戻って来てから、ユダヤ人と呼ばれるようになってきました。異邦人と婚姻をして、偶像礼拝を持ち込み、それによって神に裁かれ捕え移されたので、二度と、そこには戻るまいという決意の下、律法の学者エズラの下で、律法を遵守するという運動が起こりました。それがユダヤ教の始まりです。

そういったことから、先ほど説明しましたように、ユダヤ人というのは、律法を持っている人々という思い入れが強いです。ヨハネの福音書では、「ユダヤ人」と出て来ると、ユダヤ教の指導者を多くの場合、指しています。それから、「ユダ」という名は、「神をほめたたえる」という意味が込められています。したがって、ユダヤ人は、律法を持っていることを自負し、神をあがめていることも自負しているのです。

しかし、パウロはここで、「果たして、神をほめたたえる」と称することにふさわしいことをしているのか？と問い質しています。ユダヤ人と称して、律法を頼みとして、神を誇っています。また、律法があるので、神のみこころ、意志も知っていて、律法からの大切なことも知っています。けれども、知っているけれども、行いは伴っているのか？という問いかけです。イエス様は弟子たちに、「マタ 23:3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。」これを、私たちが自分のことを「クリスチャン」という時にどうなのか？ということをお問わないといけません。キリスト者とは、元々、「小さなキリスト」を意味しています。つまり、キリストのような者たちだ、ということです。イエス様に倣っていくことに命をかけているということです。ところが、知識としては正しいことを語っていても、イエス様の姿とは似つかわしくないことを行っている時に、同じ過ちを犯していることとなります。

2C 教師としての自負 19-20

¹⁹ ²⁰ また、律法のうちに具体的に示された知識と真理を持っているので、目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だ、と自負しているなら、

聖書がなければ、自然であるとか、良心であるとか、そういった一般的なものでしか知識と真理を得ることができませんが、律法のうちに具体的に知識と真理が示されています。それゆえ、これをしっかりと知って、それで他の人々を教える働きをしているのが、ユダヤ教の指導者たちです。自分は見えていて、相手が見えていないという前提の言葉が並んでいますね。「目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光」ということです。そして、自分には知識があり、相手はないという前提の言葉が次に並んでいます。「愚かな者の導き手、幼子の教師だ」ということです。

ここに一種の高ぶりがあります。これらのことばは、確かに聖書に出て来るものばかりで、正しいのです。けれども、「私は知っていて、あなたがたは知らない」というような高ぶりが潜んでいるのです。ヨハネ第一の学びを平日にしていますが、そこで、反キリストとも呼ばれる偽預言者たちが、「私たちは知っている」というグノーシス主義と呼ばれる偽りを持っていて見えています。ヨハネは、「神を知っているといても、神の命令を行っていなかったら、神を知らない。闇の中にいる。」と説明しているのです。

2B 律法違反 21-24

1C 自分を教えない矛盾 21-22

²¹ どうして、他人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。²² 姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取るのですか。

彼らの大きな問題は、「自分自身を教えない」ということです。神が語られていることは、まず自分自身に対して、であります。自分に神が語られて、戒めを受け、正され、そしてその正しい道に歩む訓練を受けます。聖霊の力によって、キリストの似姿に変えられるのです。そうして初めて、自分の語っていることに権威が与えられ、人々に影響を与えることができる、つまり教えることができるのです。イエス様の場合は、罪が赦されたと、中風の人に宣言されましたね。そして、ご自身に赦す権威があることを、その人を立たせることによって示されました。ですから、聖霊によって自分自身がその教えに教えられ、それで初めて人々に分かち合うことができるのです。

それができないと、知識と呼ばれるものが突出し、人に教えながら自分自身はそれを行っていないという言行不一致に陥ります。「盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。」と言っていますが、イエス様は律法学者、パリサイ人にこう言われました。「マタ 13:13 おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見栄のために長い祈りをしている。」やもめを助けるべきなのに、神の名を使って献金を搾り取っていました。そして、「姦淫するなど言いながら、自分は姦淫する」と言っていますが、マラキ書を読みますと、他の女と結ばれるために、自分を妻を離縁させる祭司たちの姿が出てきます。そして、「偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取る」と言っていますが、偶像を避けているのに、神の神殿に献げるべきものを献げないで貪っている、ということです。「マラ 3:8 人は、神のものを盗むことができるだろうか。だが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う、『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだのでしょうか』と。十分の一と奉納物においてだ。」偶像そのものは避けているのに、神に献げるものを惜しんでまで自分のものにしていくところに、貪りがあり、その貪りこそが偶像礼拝なのだ、ということです。

2C 神への侮り 23-24

²² 律法を誇りとするあなたは、律法に違反することで、神を侮っているのです。²³「あなたがたのゆえに、神の御名は異邦人の間で汚されている」と書いてあるとおりです。

律法を誇りとしている人たちが、違反することによって、律法を授けた神ご自身が侮られます。ですから、神は、正しい行いのない儀式を忌み嫌うことさえします。「イザ 1:13 もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙、それはわたしの忌み嫌うもの。新月の祭り、安息日、会合の召集——わたしは、不義と、きよめの集会に耐えられない。」律法について熱心になっていることによって、かえってその律法の主であられる神が侮られるとは、本当にあってはならない悲しいことですが、

けれども、律法を行っていない、実践していないということからそれは起こるのです。

そして、その御名が侮られていることが、明らかに出て来るのが、異邦人たちであります。イスラエルの神を知らない人々から、「彼らの神は、どうなのかね？」と侮る言葉が出ることによって、汚されるのです。これは、キリスト教会についても同じことが言えます。信じていない人が、神のことばに対して反対し、福音に反対しているのであれば、仕方ありません。そうではなく、福音を信じている、キリスト者だという人たちが、福音から逸脱したことを行っていることで、反発していたり、侮っているのであれば、まさに証しを立てようとしている人々に、つまずきをもたらしているのです。

2A 割礼の価値 25-29

1B 律法の行い 25-27

²⁵ もしあなたが律法を行うなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法の違反者であるなら、あなたの割礼は無割礼になったのです。

割礼であります。先ほど話しましたように、ユダヤ教では、ユダヤ人であることに印であり、つまり、神の国に入ることのできる確認になります。あるユダヤ教の教師は、こう教えました。「割礼を受けた者が、救われないということはない。アブラハムは、地獄の門に立っていて、割礼を受けた者たちが誰もそこに投げ入れられていないことを確認している。」これほど、割礼が救われるための確認の印となっていたのです。ユダヤ人でイエスを信じた者たちでさえ、この考えから離れることができなかった者たちがいて、パウロとバルナバがアンティオキアにいた時に、「使徒 15:1 モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。」とまで教えてしまっていたのです。

しかし、割礼の元々の意味が、いつの間にかはき違えてしまっていることによって起こっていることでした。これは、アブラハムに対して神が語られたことで、アブラハムの子孫を神は祝福することを約束されました。そこで、その子種が神の契約の民であることを示す確認の印として、親が生まれてきた男の子の性器の包皮を切るように命じられたのです。しかし、あくまでも神への信仰を持って行う行為であって、割礼を施すによって自動的にその子が信仰を持つわけではありません。信仰をもって、その確認として割礼を受けるのです。

そして、割礼は、男性の性器の包皮を切り取ることでありますが、そのことによって外からの刺激に敏感になります。包皮によって無感覚であったものが感じるようになります。それは、神が心の包皮を切り取り、その心が神の御声を聞き取ることができるようにするためです。心が神だけのものになり、御霊によって聖め別たれるためです。あくまでも、神を信じ従順であることの印であって、その逆ではありません。モーセがイスラエルの民に言いました、「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」

ですから、モーセの律法を守り行っているということで、その印として割礼を受けるならば意味がありますが、印自体が人を救わないのです。なので、律法の違反者であるならば、割礼は無意味なものであり、「無割礼になったのです」とパウロは言っています。

²⁶ ですから、もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、その人の無割礼は割礼と見なされるのではないのでしょうか。²⁷ からだは無割礼でも律法を守る人が、律法の文字と割礼がありながらも律法に違反するあなたを、さばくこととなります。

パウロはここで、無割礼の異邦人のことを考えて話しています。異邦人が、体は無割礼のまま、ただ信じて、心が清められ、それで神の言われることを聞いて守り行っているのであれば、それこそが真実の割礼、心の割礼であり、割礼を受けているとみなされるではないか、ということです。ペテロが、エルサレムの会議で語ったことと同じです。ローマの百人隊長コルネリウスとその一家が、ただペテロの語る福音を信じたことで、聖霊のバプテスマを受けました。「使徒 15:9 (神は)私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」肉体は無割礼でも、神の契約の民となったのです。

そこで、逆転現象が起こります。終わりの日に神が裁かれる時に、割礼を受けていない異邦人が神の国に入り、割礼を受けているのに、律法を違反しているということで神の国に入れぬユダヤ人がいるということで、ユダヤ教の教えとは正反対になるのだということです。それが、「さばくこととなります」という意味です。

イエス様は、この逆転現象を何度となく語られました。カペナウムにいた百人隊長のしもべが死に至る病にかかり、イエス様が治すために向かったら、百人隊長は、「あなたを家にお入れする資格はありません。ただおことばだけをください。そうすれば癒されます。」と答えました。その信仰にイエス様は驚嘆して、こう言われます。「マタ 8:11-12 あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。12 しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ざしりするのです。」

2B 心の割礼 28-29

²⁸ 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。

²⁹ かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。

ここが、ユダヤ人が外見上のユダヤ人だけで救いが保障されているだけではないことの結論です。外見における印が、内実を保障するものではありません。イエス様が福音書で、パリサイ人や律法学者に何度となく語られたのはこのことです。主は、律法と預言者を廃棄するために来たの

ではなく、成就するために来たと言われましたが、それは律法の精髓とは、心の姿勢も含めたところの行いであり、内から出たものが外の行ないに現れます。外側の行いで繕っても、いくら律法を大事にしているようにふるまっても、結局、どこかで自分の都合のよいように解釈でさえも変えてしまい、外側には良いように見えるが、内側が汚れているということが起こってしまうのです。

ユダヤ人、つまり「神をほめたたえる」という名の通りになるのは、「人目に隠れたユダヤ人」となり、つまり内実を大事にして、「御霊による心の割礼」を受けることです。自分の鈍い心が御霊によって清められて、それで初めて神の前に清く歩むことができます。そして、表向きではなく、内実が清められているので、外側はそうでなくとも、神から誉れが来ます。

初めに、「ともすると、キリスト者であっても、ユダヤ人の律法主義に陥ってしまうかもしれない。」ということをお話しました。キリスト者としての行動様式は身に着けているかもしれませんが、自分がキリスト者として歩んでいるようには、人からは見えているように見えるかもしれませんが、けれども、内実には、心の中には自分自身を求めている、自分自身を愛しているものがあるとします。それらの行動や心の状態を覆い隠し、そのことさえあたかもキリスト者だからやっているのだとして、霊的に覆い隠すことさえできるのです。

そうではないのです、御霊によって自分の心の間に光が当てられます。その時に、信仰をもって恐れずに勇気を出して、光のところに来るのです。神の愛と憐れみ、慈しみのところに行きます。そうすれば、御霊によって癒しが与えられます。神の愛が注がれます。平安と喜びが与えられます。その時に初めて、神の命じられていることを行うことができるようになります。御霊による心の割礼です。何か、クリスチャンぼくならないといけないと意気込む必要はないのです。むしろ、そのままの姿で、いわば無割礼のまま神のところに行く勇気が必要です。そうすることによって、御霊が私たちの心を清め、内側から私たちを変えてくださいます。